

## 周りの方々への感謝をこめて

伊藤 万由里

東京女子医科大学女性医学研究者支援室

同 小児科、遺伝子医療センター

略歴 1995年 東京女子医科大学医学部卒業 同小児科入局  
2002年 東京女子医科大学大学院内科系小児科学終了  
2005年 同遺伝子医療センター兼任  
2008年 同女性医学研究者支援室

### 【自己紹介】

平成7年に本学小児科に入局、臨床研修の後、大学院で難病の脊髄性筋萎縮症について研究をスタートしました。大学院在学中は、職場の先輩や同僚の理解と配慮を受けて、育児と平行して病棟勤務もこなしておりましたが、卒業後は主に研究と外来業務に従事して参りました。現在、3人の子供がおりますが、そのうち1人が大病を患い、そのときに仕事を辞める決心を致しました。けれども、小児科と遺伝子医療センターの上司の温かい配慮のおかげで、女子医大を辞めずに細々とも脊髄性筋萎縮症の研究を続けることができ、今日に至っております。

### 【この支援を受けて】

今年度、女性医学研究者支援室の募集に応募し、特任助教として採用して頂いたことを心より感謝申し上げます。立場が明確になり、責任を持って研究の成果を社会にフィードバックするための心構えが強くなったと思います。子供たちにとって母が仕事を続けることのメリットはあるのだろうか、と自問自答の毎日ですが、少しずつ仕事を進めております。せめてもの罪滅ぼしのつもりで、夜、絵本を読み聞かせる時間(ゆっくりと子供に向き合う時間)を作る努力をしていますが、理想と現実の差は縮まらず、育児も仕事もやや中途半端です。でも、この研究者支援を受けたことにより、プロジェクトの一員として仕事を続ける責任を感じ、前向きな気持ちになれたことは確かです。

### 【後輩女性医師たちへのアドバイス】

助言できるほどの経験はございませんが、母親歴約9年の立場から申しますと、子供が未就学の間は、自分のリズムで育児と仕事を両立することはある程度可能なのではないかと思います。でも、子供が就学すると、合わせて親も成長する必要があり、より度量の大きい親像が求められる、ということを感じます。病棟などの過酷な勤務の中では、そのような気持ちになる余裕はないのでは…と思います。この支援制度は今年度で終了ですが、研究職のみならず臨床で働く医師も対象にしたフルタイム以外の働き方を選べる制度があれば、同僚の医師達の重荷にならず、患者さんにも迷惑をかけず、自分自身も家族も壊れることなく、育児の経験を生かして仕事を続けていけるのではないのでしょうか。私自身は恵まれていて、温かい先生方のもとで研究のこと以外に、育児についても助言を頂きながら働けることをありがたく思っております。今後、後輩医師達が働き方を選べるような制度の確立を目指すためにも、支援を受けた私達が努力を続けることが肝要と考えております。